

青味がいつた調子で、何だがいやに六つかしそうで、初めから失敗を豫期してかゝつた。

床几を据える、見取枠で見る、鉛筆で輪廓を取る、さて、着色と行つたら案の如く、燭景の深緑な山のどんよりした色が出ぬ。

あれでもない、これでもない、へたぬりに塗り付ける、しかも盛夏の午後三時頃の日脚はぢりぢり遠慮なく、照り付ける、今は油汗三斗の淺間しき姿となつて遣つて居る。

どうやら喧しいので、氣が付いて、ふりかへつて見ると二三人の子守が早や後ろにのぞき込んで居る、とするうち迎ひにでも行つたものかおかみさんもくれば、興作爺もくる娘もくれば腕白小僧もくると云つた様な、今は後ろに左右に三面より包圍されて風はこず、妙な人いきれが鼻をつく、亦如何ともなし難し。

『マア、みいちやんの家だれ』と、さゝやくあれば、『これ畑の中に這入りやいけない』と子守を叱る銅磨聲に、びつくりする、逆も完成の見込みはないので、要所だけ仕

上げて、道具を疊み、もと來し道を後戻りせむとすれば、吾等を何と思つてか。『苦勞様でした』と云ふおかみさんありけり。

そのひ

雪の下人

七月七日晴、寫生には持つてこいと云ふ好日和、畫囊を肩に裡町を眞直に賣田山へ登つた、吾島の首夏！木も草も濃綠色だ、涼風がサツト吹く、藥師様の傍の古井戸は何と無く畫趣が充ちて居る、其れを左に見て青い／＼尺にも餘る夏草の中を抜けて高島街道へ出た、路傍には草花を摘む里の乙女の影二三、だら／＼坂を登れば破屋一つ深緑に包まれて何とも云へぬ趣き！暫しこゝに三脚据へて美の園に遊ぶだ、おゝ今夕陽は向ふの山の端から名殘の光を下界へ放つてゐる……

少女の繪

旭川 曉 雪

元來僕は繪は好きでなかつた、描きたくも

なかつた、唯他人が描くのを見るのが面白い位、丁度三年の時學校に於て共進會があつて、生徒の製作品を陳列する事となつて各自習字繪畫を描く様に命ぜられた、此の時急に野心勃勃々吾が畫を彼の額に入れたいものだと言ふ好奇心が湧いたそこで、色々の手本を見付けるに苦心し、何んでも奇抜なものを描こうと思ひ、少女を鉛筆で描いたが何うしても描けない、一時中止したがやはり僕の野心は枯れぬ。

もう愈々明日は×切期限である、そこで夜おそく燈火のもとにかいたところが、偶然にも一寸とうまく描けた様で、少し似ておると思つたから翌日學校に出した所、無事會場に出品せられた。

幸か幸かこれより僕は繪畫の面白いものであるを知つた、以後夢中で寫生した、丁度夏休みに白馬會の中原君が歸省せられて、共に石狩河畔に於て畫架に向ひ種々有益なる事を教はつた、遂に今日では到底筆を放すことができぬ。

大失敗